02

未来を創る

ありたい姿を描き、叡智を集結させ、
時代を切り拓く

企業理念体系

Mission 使命

**我々は、一人一人が卓越した専門性と
高い倫理観を持つプロフェッショナルであり、
社会とお客様の課題解決に貢献する**

Vision 目標 Goals

- ネットワークのリーディングカンパニーとしての高い誇りを持つ
- ネットワンならではの付加価値を創出し、継続した成長を実現する
- 絶え間ない自己研鑽で心と技術を鍛える精鋭集団であり続ける
- 幅広いステークホルダーへの責任を果たすため、
  適切な収益構造を維持する

netone valley

2023年5月、「新しい価値を創造し豊かな未来を切り拓くチャレンジの場」をコンセプトに、イノベーションセンター「netone valley」を開設しました。社会との幅広い接点を生かし、共創を通じて新たなサービスを創出することで、社会課題の解決に貢献していきます。

ネットワークが持つ可能性を信じ、ネットワークインテグレーターとして社会的使命を果たす

代表取締役
社長執行役員
最高経営責任者（CEO）
竹下 隆史

ネットワンが培ってきたもの

企業としての進化とカルチャー変革で飛躍的に成長した3年間

前中期経営計画期間（2022-2024年度）を振り返ると、成長戦略を着実に実行し、それを支える経営基盤の強化が順調に進んだ3年間でした。2025年3月期には過去最高の受注高、売上高、営業利益を達成することができ、成長戦略・経営基盤強化の両面で企業として成長することができました。

特に、企業文化の変化では、社員間の連携や相互理解が大きく進みました。具体的には、お互いを認め合い、理解し合うという風土が着実に醸成され、社員自身もその変化を感じています。

私が最も重要だと考えているのは、社員一人ひとりがどのような気持ちで仕事に向き合っているかということです。「何のために仕事をしているのか」を深く考え、志やビジョンを持つことで、成長も考え方も変わってくる。視座を高くして取り組めば、思考の深さや広さが変わるだけでなく、仕事がもっと面白くなり、自分自身の生活も豊かになります。これからも、好奇心と探求心を持って、さまざまなことに挑戦してほしいと思っています。

経験や知見を体系化して伝承する真のプロフェッショナル集団へ

当社は2022年に「人とネットワークの持つ可能性を解き放ち、伝統と革新で豊かな未来を創る」というPurposeを策定し、同時にMission、Vision、Valuesを策定しました。その中で、私が最も重視し、社員に意識してほしいと考えているのは、Missionに掲げている「卓越した専門性と高い倫理観を持つプロフェッショナル」です。多くの方はプロフェッショナルと聞くと、その人にしかできない得意分野や特別なスキルを持つ人だと思うかもしれませんが、私は、それはエキスパートであり、プロフェッショナルではないと考えています。プロフェッショナルとは、自分にしかできないことを体系化し、誰もが実践できるような仕組みや体制をつくり上げられる人のことです。特に、私たちの業界のプロフェッショナルは、そうあるべきだと考えています。

Purposeの「伝統と革新」を読み解くと、日本の芸道の「守破離」の考え方が込められています。「伝統」という型を守り、それを極めた後に、革新によって型を破る。そして、型から離れて新しい独自の型ができたときに、必ず体系化して伝承しなければなりません。社員一人ひとりが、このサイクルをしっかりと理解して、日々の業務に取り組むことが、企業価値と顧客価値の最大化につながります。

当社の企業理念の一つであるValues（価値観）には「大切な人に誇れる仕事」という言葉があります。経験や知見を次世代へと継承していく仕事は、誇れる仕事につながります。また、何事からも逃げずに挑戦し続ける姿勢も重要です。伝統に寄り添い、その伝統を継承しながら、革新を繰り返していくことが、組織の真の強みになると考えています。

前中期経営計画期間（2022-2024年度）の成長

	2021年度 実績	2024年度 実績
売上高	1,885億円	2,325億円
営業利益率	8.9%	9.8%
サービス比率	44.5%	48.3%
ROE	15.8%	-

さらなる価値創造を目指して

業務プロセス改革を推進し、「目利き力」を高める

2025年4月にスタートした新中期経営計画の経営基盤強化では、「企業文化改革」を中心に据え、これに続く重要な取り組みとして「業務改革」に注力します。

前中期経営計画では、経営基盤の強化策として「徹底した見える化」を目指し、その取り組みの一つとして業務プロセスの見える化を進めてきました。2025年度は見える化の成果として横連携を強め、組織力の向上とデータ活用を加速させるためのシステムを導入する予定です。業務の進め方自体を変え、プロセスをシンプルにした上でIT統制も働かせていきます。現在は営業部門が推進役を担っていますが、今後はシステムワークフローの導入によって人が介在しない仕組みに移行します。また、今回のシステム刷新を契機として、社員一人ひとりが小さな改善を積み重ね、目の前のプロセスを見直すことで、「全社員で業務をよりよくしていく」という成功体験へとつなげていきたいと考えています。この取り組みを成功に導くためには、プロジェクトに関わるメンバーだけでなく、全社員が「自分事」として主体的に捉える意識が不可欠です。業務改革を真に意味あるものにするためには、社員から前向きな意見やアイデアが自然と沸き上がり、組織全体に広がっていくことが決め手になると考えています。

そして、業務改革によって生み出された余白時間を、教育の充実やコミュニケーションの質を高める取り組みにつなげていきたいと考えています。AI活用などによる時間削減の成果は一定の効果を上げていますが、その余白をいかに有効に活用して具体的な成果に紐づけられるかが今後の課題です。

また、新中期経営計画ではこれまでの事業戦略とサービス戦略を「事業・サービス戦略」として一体化し、より最適な商品とサービスを組み合わせた提案に向け、戦略マップを策定して取り組みを明確にしました。これまで課題解決に向けた取り組みをサービスとして体系化し、横展開を図ってきました。今後はサービスを「クリエーション」と「デリバリー」の2つの側面に分けて捉えることも重要です。サービスの原点は常にお客様の近くにあり、現場でのクリエーション、創意工夫こそが価値の源泉になります。デリバリーをパートナー企業と連携して展開することで、サービス提供における役割を分担し、それぞれが強みを生かして価値を高めることが可能になります。こうした協業を通じて、企業間で価値を最大化する新たな価値連鎖の創出が期待されます。

社員一人ひとりが小さな改善を積み重ね、
全社員で業務をよりよくしていく

前工程からのインプットを磨き、
価値のあるアウトプットとして次につなげる

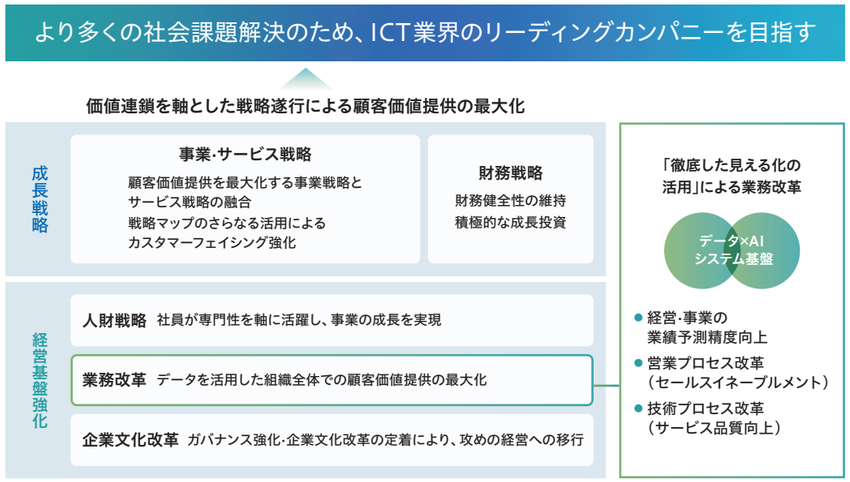
「価値連鎖」のサイクルを広げ、揺るぎない競争優位性を築く

新中期経営計画では、「価値連鎖」を軸とした戦略遂行による顧客価値最大化を目指しています。この「価値連鎖」は、私が当社の競争優位性を深く探究する中で着想したキーワードです。当社は従来から「目利き力」を強みにしてきましたが、その力がいかに発揮されてきたのか改めて振り返ると、事業活動の各工程において、前工程から受け取ったインプットを磨き上げ、さらに価値あるアウトプットとして次につなげる「価値連鎖」の仕組みによって培われてきたことに気づきました。つまり、「価値連鎖」は目利き力の源泉であり、各工程でより多くの価値を付加していくことは、顧客価値の最大化だけではなく、組織全体としての価値創造力の強化につながります。

私たちの仕事は、インプットとアウトプットが連続するプロセスで成り立っています。このプロセスにおいて重要なのは、本質を見抜く力と、困難を乗り越える知恵や工夫です。価値は、決して突然生まれるものではありません。必ず誰かからのインプットがあり、それを受け取った人が磨き上げ、創意工夫を重ねることで、価値が創出されるのです。社員一人ひとりが「価値連鎖」を常に意識して、目の前のプロセスの改善に当たり前に取り組むようになった時、真の意味での目利き力が発揮できると考えています。そして、このサイクルを継続的に回し続けることで、変化の激しい時代でも揺るぎない優位性を築くことができます。

自分が生み出したアウトプットを磨き、次のインプットの質が高まるサイクルを意識できれば、ワクワクしながら仕事に取り組むことができます。当社のフラットな組織体制と、「何でもつなぐ」という文化は、価値連鎖が浸透しやすい環境と言えます。社員同士の強いつながりを生かし、お互いのミッションを通じて価値を結びつけることで、組織全体としてより大きな価値を生み出していくこと、それこそがWAYで掲げている「お互いに半歩踏み込む」というつながりであり、「価値連鎖」には人との連鎖を大切にしてほしいという想いが込められています。

経営基本方針



シナジーによって、人とネットワークのもつ可能性をこれまで以上に大きく解き放つ

未来へ、可能性を解き放つ

インテグレーションをさらに強化し、シナジー創出で業界をリードする

私は、DXの遅れが課題とされる日本において、ネットワークの重要性は今後ますます高まっていくと考えています。ネットワーク上にはデータが流れ、その先にはアプリケーションがあります。そのアプリケーションの中でも情報が動き、そこには人が関わってきます。ネットワーク設計においては、このような動線をいかに掌握するかどうかが最も重要です。

今後当社は、データの流れを的確に把握した上で、最先端のネットワークの設計ができるネットワークインテグレーターとして、さらに進化していくべきだと考えています。ネットワークの利用状況を分析することで、経営指標と連動した意思決定が可能となり、迅速かつ的確な戦略を立案できるようになります。さらに先を見据えると、システムのクラウド化やSaaS化が進んでいくことで、基幹システムを含めてネットワーク上のシステムを利用するケースが増えていきます。そうすると、従来のシステムインテグレーターとして活躍していたエンジニアやプログラマーにもネットワークの知識が必要となります。ネットワークインテグレーターの世界でも、ソフトウェアのオープン化が進むことで、プログラムやコードを書くことが求められるようになります。このように、プログラムを専門としていた人たちの仕事がネットワーク領域へと広がる一方、ネットワークのエンジニアにもプログラミングの能力が求められるようになり、両者の間でスキルの不一致が起きてきます。しかし、このミスマッチは大きなシナジーを生み出すチャンスでもあります。システムの個別開発に従事していたプログラマーがネットワークのコードを書けるようになれば、ネットワークエンジニアの母数が大幅に増加します。また、ネットワークエンジニアがプログラムを書くようになれば、品質管理の視点が非常に重要になるので、プロジェクト管理や成果物の精度を高めるためのノウハウを習得する機会が広がります。

SCSKとの経営統合は、このようなエンジニアのシフトやスキルの変化も見据えたものであり、そこで生み出されたシナジーは人とネットワークの持つ可能性をこれまで以上に大きく解き放つ力を持っていると考えています。

ネットワークという最重要インフラを、つくり、守り、磨いていくという使命を果たす

最後に、我々のビジネスの社会的価値についてお話しします。近年の社会は、変化が非常に激しく予測困難な環境が続いています。そのような時代だからこそ、私たちのビジネスの価値はますます高まっています。

災害発生時を例に取ると、発災直後には通信ネットワークの重要性が非常に高まりますが、時間の経過とともに人々の生活に直結する電気、ガス、水道の重要性が高まる傾向があります。しかし、実際には電気やガス、水道にもICT技術が広く活用されていて、それらを支えるネットワークの安定稼働が不可欠な要素になっています。そうした点を踏まえると、現代においてはネットワークこそが極めて重要なインフラであり、その重要性は今後ますます高まっていくと考えています。

ネットワークの可能性の拡大

* Cyber-Physical System

当社は、この最重要インフラをつくり、守り、磨いていくという使命を担っています。社員には、そうした使命を持つことによる面白さを知ってもらい、当たり前と思うことにも一段レベルを高めて取り組んでもらいたいと考えています。志を持って仕事をしている人は成長します。

自分のアウトプットのその先を想像しワクワクを広げることが成長につながる

WAYの中で一番人気のある「ワクワクを広げる」という言葉のように、自分のアウトプットにもっとワクワクしてほしいと考えています。一方で、ワクワクがまだ仕事と結びついていない一面もあります。自分のアウトプットのその先を想像し、ワクワクできれば、一人ひとりの成長につながり、会社はもっと成長していきます。私はこうした連鎖を「仕事の本当の楽しさ」として伝え、社員の皆さんのワクワクをさらに引き出していきたいと思っています。

最後に、お客様、そしてパートナー企業の皆様にお伝えしたいのは、当社は人のつながりと同様に、企業間のつながりも大切にしているということです。私たちは、これからも価値連鎖の中でパートナー企業の皆様と共にプロセスを磨き、社会課題の解決に取り組んでいきたいと考えています。

国内屈指の技術と人財力でネットワークの未来を切り拓く

執行役員
ビジネス開発本部長
藤田 雄介

**すべての進化はネットワークから
当社が果たすべき使命と挑戦**

私がネットワークの面白さに気づいたのは、前職でのある出来事がきっかけでした。お客様に初めてネットワークを導入して「問題なく稼働できた」と安心していた矢先、数時間後にまさかのトラブルが発生して停止してしまったのです。その時、「ネットワークは、まるで生き物のようだ」と感じ、それが魅力として心に強く残りました。当社に入社してからも、その想いはずっと変わらず持ち続けています。

最近では、生成AIなどの新しいテクノロジーが次々に生まれ、流れるデータや用途に変化が生まれ、技術革新によってネットワークの役割も進化しています。すべての中心となるネットワークはまさに生物のように進化し続けており、それに呼応するようにお客様の課題も変わり続けています。また、近年では、デジタル技術をいかに活用して事業を加速させていくかが、企業の成長を左右すると言われています。しかし、日本は2024年の世界のデジタル競争力ランキングで31位と、デジタル化の必要性を感じているものの、デジタル化の進展に課題が残っているのが現状です。加えて、ネットワークを含めたICTインフラの運用委託業務が、2023年からの2年間で倍増すると言われていますが、委託先のICT人財不足などがネックとなってなかなか委託先が見つからないことも、デジタル化の妨げの要因となっています。

経済産業省が2016年に公表した調査によると、日本国内のICT人財は2030年に、79万名不足すると試算されています。ICTの中でも、特にネットワーク分野は専門性が非常に高いことに加えて、トラブル時の社会的なインパクトが非常に大きいため、安全性・安定性が強く求められ、そのために高いスキルや幅広い知識が必要になります。こういった課題を、事業を通じて解決していくことこそが当社の仕事であり、国内No.1のネットワーク企業の使命であると考えています。

ネットワークは技術の進歩と共につながる対象や流れるデータが多様化し、その複雑さが増す

**複雑化するネットワーク社会に
堅牢かつシンプルなソリューションを提供**

今や、私たちの生活はネットワークなしには成り立ちません。例えば、モノづくり、流通、販売に関わる情報、さらには日々の金銭のやり取りまで、その多くがオンラインで行われ、日常的な情報の伝達もほぼすべてがネットワークを介して行われています。自動車、電車、飛行機といった交通輸送網でも、ネットワークは幅広く活用され、人々の生活に深く浸透しています。ほんの10数年前であれば、さまざまなサービスでネットワークトラブルが発生してもその影響は限定的でした。しかし、今はネットワークが止まったら、人々の生活や企業活動に大きな影響を与えてしまうため、ニュースでも大きく取り上げられることが当たり前になっています。

同時に、ネットワークは技術の進歩とともにつながる対象や流れるデータが多様化し、その複雑さが増しています。企業のオフィスで使われているネットワークと、生成AIのデータセンターに必要なネットワーク、製造業の生産ラインで使われるネットワーク、そして車の自動運転のためのネットワークは、それぞれ形態や扱うデータが全く異なるので、一辺倒のネットワークでは対応ができません。複雑なシステムだとネットワークやセキュリティを制御するのに約10万行のコードを設定する必要がありますが、今は、それを数万台の機器に設定し、その整合性を人が確認しています。接続先や流れるデータの種類が増えれば増えるほど、この複雑さはさらに増していくばかりです。また、セキュリティについても、人の振る舞いに対するセキュリティから各種ソフトウェアのセキュリティまで多岐にわたる要素があり、ネットワークの形態やデータの種類と組み合わさると、さらに複雑性が増していきます。

こうした課題に対応し、安全かつ安定して、しかも人手をかけることなくネットワークを構築・運用して解決していくためには、高度な専門技術をいかにシンプルにしていくかが重要です。当社は、長年にわたって技術と実直に向き合い、これまでに非常に大規模なネットワークの構築・運用を数多く手がけてきました。今後、そこで培った知見や経験をデジタル化して再利用し、さらにAIやさまざまなデータも活用しながら、ネットワークの設計・構築・運用で実施する内容を、より堅牢かつシンプルにしていきたいと考えています。

戦略マップと技術戦略

市場	エンタープライズ	通信事業者	パブリック	パートナー

事業セグメント戦略

	サービス戦略	技術戦略
A	**先進技術で新たな収益獲得** 商材：先端技術	**先端技術力強化による新たな収益獲得の挑戦**
B	**サービス収益（ストック）の拡大** 商材：コンサルティングサービス、自社クラウドサービス、運用サービス、セキュリティサービス、XaaS	**技術活用力強化による売上と利益の向上**
C	**品質向上による市場占有率拡大** 商材：機器販売、導入支援、保守、ベンダーサポート	**基礎技術力強化による市場占有率の拡大**

ネットワークを起点として、そこにつながる
さまざまな技術を学ぶことができる

私たち自身がICT・ネットワークの新たな
未来を切り拓けることに期待が膨らむ

市場に対応した技術戦略で、
お客様への提供価値を最大化

現在、当社では、2024年に策定した「戦略マップ」と連動させながら、顧客価値の最大化に向けた技術戦略を進めています。戦略マップでは、市場と私たちが提供する商材・サービスをクロスオーバーさせることで注力領域を明確化していますが、そこにカテゴリごとの技術戦略を連動させていく方針を取っています。（P.20「戦略マップと技術戦略」参照）

まず、戦略マップCの機器販売、導入支援、保守などの分野では、品質向上と標準化を目指しています。はじめに品質を向上させることで、当社ならではの強みを既存のお客様にしっかりと提供していきます。さらに、標準化はより多くのお客様に当社のサービスを提供するためのカギとなるため、いかに標準化して効率アップを図りながら品質を向上させていくかが重要です。

次に、戦略マップBについては、長期間にわたってお客様のシステム運用を担うストック型サービスを拡大していきます。顧客接点をより強化していけば、収益の継続性を高めることになり、結果として当社全体の安定性を高めることにもつながります。

そして、戦略マップAの先端技術については、日々進化し続けるさまざまなICT技術を確実にキャッチアップし、それを当社がこれまでに培ってきた知見と組み合わせて、お客様にいち早く提供することを目指しています。

この三つの軸と合わせて、AIやデータの活用によりシンプル化・自律化・自動化を実現していくのが全体の技術戦略です。

ネットワーク起点で複数スキルを獲得
次世代エンジニアに求められる知見と進化

技術戦略を進める上で、人財の育成と強化は不可欠です。現在、当社では、社員一人ひとりのスキルレベルと専門領域を一目で把握できる「スキルマップ」を活用し、計画的な育成に取り組み始めています。

ネットワークのエンジニアは、ネットワークを起点として、そこにつながる技術を学ぶことができます。私自身も、ネットワークを中心に据えながら、さまざまな技術要素を取り入れることで知識やスキルを磨いてきました。とりわけ生成AI時代においては、多角的なスキルセットを求められますが、ネットワークを起点にすることで、この時代に求められる知識やスキルを効率よく身につけることができます。米国のICT企業では一点突破型で専門性を高めていく人財が多い一方で、日本企業の強みは、インフラだけでなくアプリケーションも含めたお客様体験までトータルで提供できる点にあると考えています。とくに生成AI時代においては、複数のテクノロジーを扱える人財の価値がさらに高まっていくと考えています。

また、私たちの業務フローには、コンサルティングから提案、設計、構築、保守運用という一連の流れがありますが、今後はコンサルティングから提案までの「前工程」を担うエンジニアと、安定稼働を実現する「後工程」を担うエンジニアの重要性がさらに高まります。現状では、ICT業界全体で前工程が重視される傾向があり、それが後工程の人財不足やデジタル化の遅れにつながっている側面があります。当社としては、前工程と後工程を両輪とすることで、お客様のシステムを安定稼働させる中で出てきた課題を確実に拾い上げ、保守運用からコンサルティングにつなげるサイクルを生み出していく。これが私たちの勝ち筋の一つであり、そうしたサイクルを見据えたエンジニアの育成やスキルシフトを進めていく方針です。

さらに、人財の配置や教育においても、これまでの知見をデジタル化してシンプル化を進めていきます。これによって、教育の効率化につながるだけでなく、人財配置においても専門性の高い領域とそうでない領域での役割分担がより効果的に実施できるようになると考えています。

新たな挑戦への機会が到来、
技術力を磨き、未来を拓く

当社での先端技術の活用として大きく二点あり、一つは、デジタルツインによる検証を通した安全性・安定性の追求。もう一つは、データやAIを活用した自律化や標準化を含めたシンプル化です。

当社は、ネットワーク領域では国内No.1の技術力を持っていると自負しており、非常にレベルの高いエンジニアが多数在籍しています。そうした高い技術力と専門性を持ったエンジニアたちが、実直に技術と向き合いながら安全性と安定性を追求し続けることはもちろん継続していきます。同時に、インフラ領域のシンプル化を推進し、仮想空間での体験やソフト開発と連携したAI活用などお客様の事業により深く関わる分野まで領域を拡大し、持続的な成長を目指します。

さらに、未来に向けて、経営統合を行うSCSKとのシナジーも創出していきます。例えば、セキュリティの観点で言えば、ICT基盤はもちろん、製造業やソフトウェア開発のサプライチェーン、さらにはモビリティなど、当社が培ってきたセキュリティ技術をより幅広い領域に展開していけると考えています。また、ネットワーク領域においても、国内のネットワークを牽引してきた企業の使命として、運用の自律化を実現し、両社が手掛けるシステム全体の価値を高めていくとともに、その仕組みをグローバルに展開することも視野に入れていきたいと考えています。

最近、私がよく考えているのは、ネットワークの未来です。例えば、東京・大阪間がどれくらい遠いのか、近いのかを表現するとき、距離よりも移動時間で表現することの方が多くなっています。また、「タイパ（タイムパフォーマンス）」という考え方が広まっているように「時間」を重視する傾向がいっそう強くなってきています。こうした変化には、ネットワークの普及・進化によって、コミュニケーションのリアルタイム性が向上したことが大きく影響していると考えています。これまでネットワークは、私たちの行動や思考を大きく変えてきました。今後、ネットワークがさらに進化し、そこにデータやAIの活用が加われば、リアルタイム性がさらに高まり、タイムラグがなくなるだけでなく、未来予測も加味しながらコミュニケーションをとっていく時代が来るのではないかと想像し、期待を膨らませています。

私はテクノロジーが好きで、その進化を見続けたいという想いで、ICT業界でキャリアを積んできました。今回の経営統合を機に、当社とSCSKが緊密に連携・連動していけば、テクノロジーの進化を見るだけでなく、私たち自身がICT・ネットワークの新たな未来を切り拓けるのではないかとワクワクしています。

すべての社員と共に、豊かな未来を切り拓いていくために、これからも技術と真摯に向き合い、共に知見やスキルを磨き続けていきたいと考えています。

「netone valley」から「未来」へ イノベーションと想いをつなげる

新たな価値を生み出し、新しい未来を切り拓くネットワンシステムズ。今後、私たちの技術はどのように磨かれ、どう発展していくのか——目指す姿である“人とネットワークの持つ可能性を解き放つ”を体現するために、「共創」をテーマに挑戦を続けるイノベーション推進部のメンバーに話を聞きました。

Why?

なぜ共創が必要なのか？

近年、社会が多様化・複雑化し、企業が社会課題を単独で解決することは難しく、パートナーとの「共創」が不可欠になっています。その一方で、行きすぎた「競争」によって重要な社会課題が解決されず、世界が危機に陥りかねない懸念も生まれています。私たちネットワンは、30年以上にわたってネットワーク分野を専業として、最先端領域でビジネスを展開してきました。しかし現在、ネットワーク上のデータ活用や生成AI分野における技術進歩が格段に速まっています。そのため、技術のキャッチアップはもちろん、経営資源の観点からも、外部の企業・団体とのリレーションシップがより重要になっています。

Members

ビジネス開発本部
イノベーション推進部
部長
門脇 広平

ビジネス開発本部
イノベーション推進部
技術開発チーム
マネージャー
織原 卓司

ビジネス開発本部
イノベーション推進部
技術開発チーム
シニアスタッフ
本間 あや

デジタルイノベーション 共創ビジョン

門脇「昨今の社会環境や事業環境の変化を踏まえると、外部との関係では、まずはビジョンや想いを伝え合い、共通認識を構築した上で、健全な『競争』によって互いに高め合っていくことが重要だと考えています。さらに、志や認識を共有できるパートナーの皆様との『共創』の推進が必要不可欠です」

このような考えのもと、当社は「ネットワークの力で、世界に創造力を」をコンセプトに掲げ、デジタルイノベーションを推進しています。

織原「ネットワークはデータを運ぶための単なる情報の通り道ではありません。『技術と人』、『人と人』、『価値と価値』をつないで、新たな可能性を見いだすための“創造のインフラ”として捉えています」

現在、イノベーション推進部は、安全で柔軟かつ未来志向のネットワークニーズに応えながら「社会の創造力の循環を目指す」こと、そして「人と社会の創造力を改善する」ことをミッションとしています。その実現に向けて、デジタルイノベーションの事業活動全体を“共創・共生プラットフォーム”として発展させることを目標に掲げています。

志や認識を共有できる パートナーの皆様との 『共創』の推進が必要不可欠

門脇 広平

What?

誰と何を共創するのか？

当社は、パートナーとの共創の中心地としてイノベーションセンター「netone valley」を2023年5月に開設しました。netone valleyには共創に必要な設備や機器はもちろん、最先端の技術情報やコミュニティ、国際的な学術交流の機会提供など多様な有形・無形のアセットを揃えています。

そして、これらのアセットを活用して、さまざまな課題解決を目指すための共創推進プログラムが「netone Co-Creation」です。このプログラムでは、共創パートナーが思い描くICTで「実現したいこと」「解決したいこと」を明確にし、さらには「考え方」や「取り組み方」といった実現方法を具体化するために必要な枠組みとメニューを用意しています。あらかじめ進め方を定義しておくことで必要なアセットを効率的に組み合わせ、目的意識を共有した上で、課題解決に向かって支援できるところに特長があります。

本間「『netone Co-Creation』は、何度も失敗を乗り越えてつくり上げたプロセスです」

共創のプロセスでは、参加者の熱量が高まり議論も活発に交わされますが、議論の流れを整えながら本題に立ち返るために焦点を戻す必要もあります。そうした試行錯誤の繰り返しから「netone Co-Creation」は磨き上げられてきました。

また、共創の構想を固めていく前提として、お互いのゴールの明確化、合意形成に至るプロセス、この期間でここまで進めるといった目標設定も重要です。こうした経験から、中長期の視点でパートナーに寄り添うことを重要視しています。

門脇「私たちネットワンシステムズは1988年の設立以来、常に『中立』であることを大切にしています」

これまでにファシリテートしたプロジェクトの中には、最終的にお客様から「ネットワンが、私たちを一つのチームにしてくれた」という言葉をいただくほど、中立的な立場でお客様のメンバー同士をつなぐことができた事例があります。

本間「『ネットワーク機器のベンダーだけではなく、一緒に考えてくれるパートナーなんですね』という言葉がすごくうれしかったです」

このプロジェクトでは、当社の技術チームや営業担当者たちが現場に何度も足を運びました。そして、非常に多くの拠点での作業を少人数で行っていることを体感することで課題に対する共通認識をつくり、お互いに熱量を高めていきました。

『ネットワーク機器のベンダーだけではなく、一緒に考えてくれるパートナーなんですね』という言葉がすごくうれしかった

本間 あや

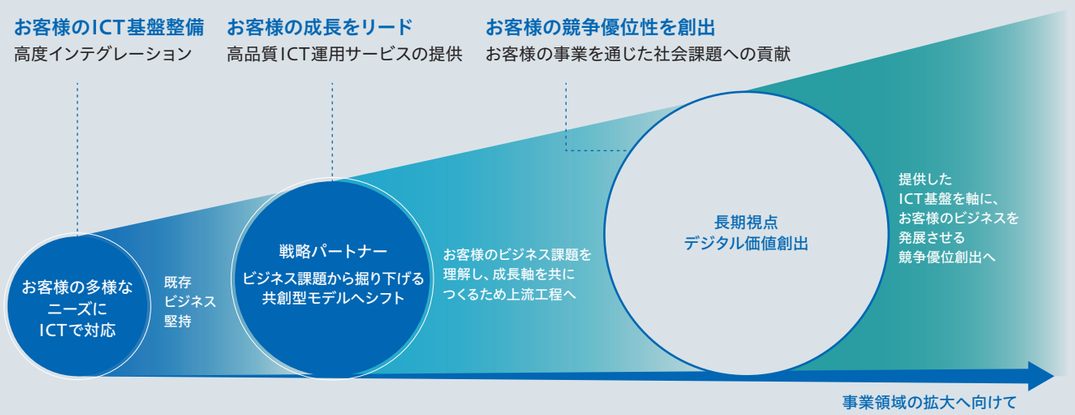
門脇「『泥臭く汗をかく』ところは、我々が長く続けてきたことであり『らしさ』です。現場に足を運んで認識を合わせて、お客様の状況や課題に至った背景を理解できれば、環境に即したアイデアを出すことができます」

共創プログラムでは、当社が長年にわたって蓄積してきた「知財」も強みの一つとして生かされています。

織原「お客様からは、私たちの技術力や目利き力など、伝統として受け継がれてきた知財に強い期待をいただいています。最近では、モノではなくて、アイデアを求められるケースが増えてきています」

中には「ネットワークの10年後を想像して提示してほしい」という相談が持ち掛けられることもあります。そのため、今後は「お客様の成長をリード」する戦略パートナーから、もう一段上の「お客様の競争優位性を創出」する共創の姿を追求しています。

ネットワンが目指す共創の姿



Where?

共創の先に、どこへ向かうのか？

netone valleyの開設以来、国内外から多くのお客様が来場し、その成果も徐々に見え始めています。先進技術の提案や異業種交流によって、新たな視点やDXに向けた発見、失敗事例からの気づき、新規事業のヒントが得られたという声も聞かれます。

その上で、今後さらに共創の輪を拡大していくためには、個人の暗黙知を組織としての共有知に転換し、参加者が同じ地図を見て議論できるような状態をつくっていくことが必要です。

本間「チャレンジの数だけ価値が生まれます。その体験はベテランから新人へと受け継がれ、未来への投資となり、それを受け取ったつなぎ手がまた新しい価値を上乗せする。netone valleyは成功だけでなく、前向きな失敗も資産として循環させる場所であってほしい」

織原「ネットワンは、新しいものを見つけて広げていく開拓者として成長してきました。さらなる成長のためには考えながら一歩ずつあゆみを進めてチャレンジすることや、新たな取り組みに意義を感じる文化を継承していくことが重要です」

門脇「私たちのこれまでの挑戦を伝承しながら、共創に向けた取り組みを前進させていきたいです。さらに、最新技術の最前線で活躍する方をお招きし、交流を図る『ITvalue+』のようなイベント開催などをきっかけに、自分たちをもう一度見つめ直すことは、強みを再認識するために非常に重要だと思います」

共創推進プログラム「netone Co-Creation」

これまで着実に拡大し、確かな進化を遂げてきた共創プロジェクトは未来へ向けて進化を続けます。そして、共創プロジェクトから生まれた新たなテクノロジーが次々と社会実装され、行動変容が進んでいった先に、人は、そして我々は何をすべきか、私たちは考えます。

本間「我々もお客様も、共創という取り組みに対して、ワクワクした気持ちを持てることが大事です。私も毎回すごくワクワクして、楽しみながら取り組んでいます。その雰囲気がメンバー全員のモチベーションに必ず影響していくと思っています」

門脇「私は、新しくつくったものを社会実装まで至らせたいという想いがあります。共に生み出した価値で人々の生活や行動に変容をもたらすことこそが共創であり、最終的な完成形だと捉えています。それによって、持続的な広がりを持てるようにしていきたいです」

織原「私も社会実装を目指したいです。共創プロジェクトやイノベーションを青写真で終わらせずに、自分たちで試行錯誤し続けて、最後までやり切るのがネットワンのあるべき姿だと思います」

門脇「今後、生成AIがどれほど高度化し人間の仕事を次々に代替したとしても、理想や未来について腹を割って語り合い、互いの熱量をぶつけ合いながら新しい未来を描き上げることは、人間にしかできない営みだと私は考えています。netone valley が日本はもちろん、世界中の変革者にとってその共創の舞台となり、挑戦の過程を発信するゲートウェイになれたなら、これに勝る喜びはありません。その実現のため、一日一日を大切に、多くの同志と全力で精進していきたいです」

自分たちで試行錯誤し続けて、最後までやり切るのがネットワンのあるべき姿

織原 卓司